遺構を縫う

-「窓を介した記憶と風景の日常化」-

3月、気仙沼へ訪れた時に私たちは、温度差のある“ちぐはぐな風景”を体験しました。

- 海を覆う、真っ白な防潮堤。

- 草木が鬱蒼と生い茂る、野生化していく震災遺構。

- デジタルサイネージがきらめく道の駅。

- 嵩上げされた土地へ住む地域の人々の日常。

震災から 10 年という分岐点である現在に、

このような異なる空気感をささやかに縫うことに、生きた記憶の宿る風景があると考えます。

ちぐはぐな風景が混在する鉄道跡上に、プログラムをもつ6つの “小さな日常” をそっと置き、

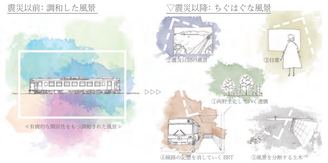
気仙沼線の車窓と重なる窓を介して、日常へ取り留めて置き、風景を眼差し、

震災の記憶と移り変わる風景を地域の日常へ優しく縫い合わせていくことを提案します。

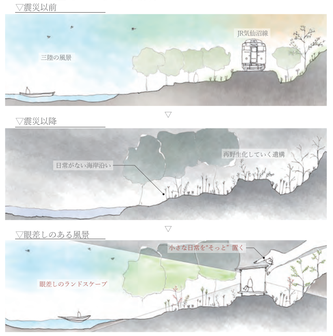
記憶と風景を今を生きる日常へ縫い合わせることで、震災以前の風景へ還ることを考えます。

1. 敷地調査｜ちぐはぐな風景

震災以前: 調和した風景　　▽震災以降: ちぐはぐな風景

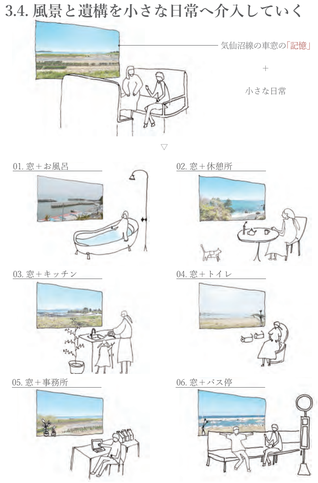

<有機的な関係性をもつ調和された風景>
<道路>
<自然>
<住宅>
<民家>
<民家>
<民家

3.3. 眼差しのある風景



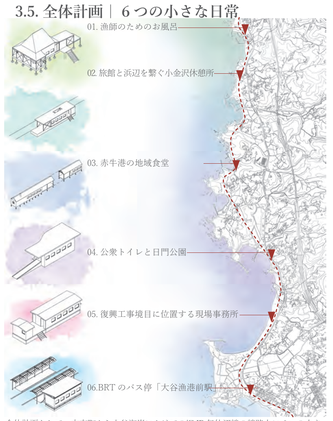
小さな日常を線路跡上にそっと置くことは、気仙沼の風景に眼差しをつくることである。日常的な窓を介し、震災以前の風景と以降の風景を重ね合わせることによって、弱い記憶の宿る風景を提案する。

3.4. 風景と遺構を小さな日常へ介入していく



気仙沼線の記憶をもつ窓を小さな日常にそっと重ねる。日常の背景となることもあれば、ふとした瞬間に風景と向き合うこともある日常を風景と繋ぎ、過去の記憶とも繋ぐことを目的にする。

3.5. 全体計画｜ 6つの小さな日常

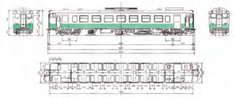


全体計画として、本吉町から大谷海岸にかけての旧JR気仙沼線の線路上に6つの小さな日常をもつ建築を配置していく。「漁師のためのお風呂」や「BRTのバス停」など敷地周辺との物語性を、よりまえプログラムを決め、さりげなく人の日常的な居場所を計画していく。防潮堤や再野生化していく遺構と近すぎず強すぎない関係性を目指していく。

3.6. 気仙沼の日常に馴染む建築

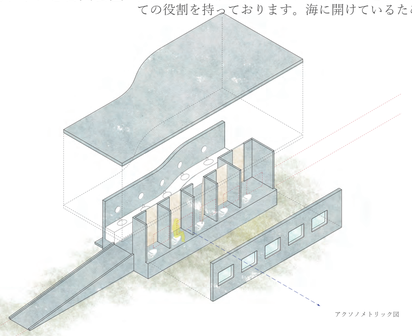
建築は意匠的なデザインをするのではなく、気仙沼に実際建っている建築と同じ温度をもつことを意識し、設計していく。

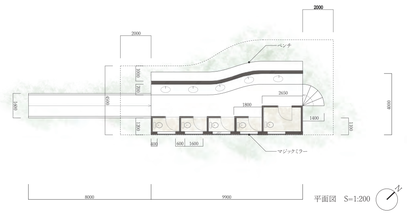
3.7. 気仙沼線のスケールを投影すること



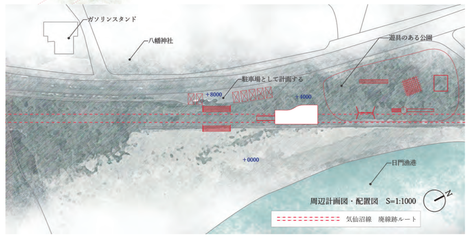
JR気仙沼線のスケールを建築へ投影し、震災以前の記憶を小さな日常へオーバーラップしていくことにより、記憶が重層的に積み重なる体験となる。

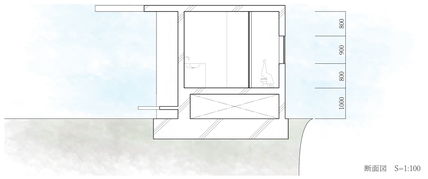
04. 公衆トイレと日門公園：内陸側と風景が連続する海に開けた漁港と、分断された遺構が残る浜辺に公衆トイレと公園を提案します。敷地周辺には一般道に隣接するガソリンスタンドがあり、また大谷小学校・中学校の通学路としての役割を持っております。海に開けているため草木の生えた遺構周辺は明るく、遊具のある公園と公衆トイレを置くことで、ただ通りすぎず、ふと立止る居場所として計画していきます。





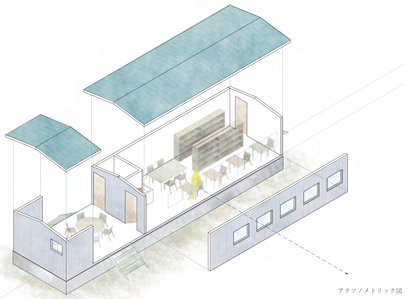
平面図　S=1:200

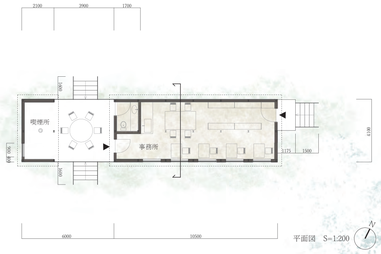




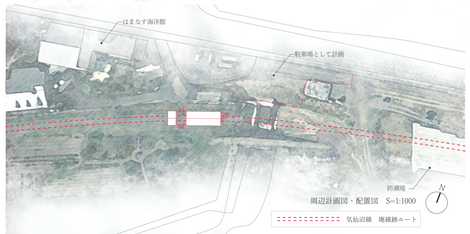
断面図　S=1:100

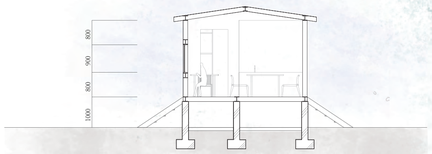
05. 復興工事境目に位置する現場事務所：防潮堤の復興工事と遺構が再野生化していく光景が隣接する敷地に工事現場事務所を提案します。異なる空気感の境目の遺構側に現場事務所を配置し、作業当事者の人たちをその境界線を日常的に跨がせることによって、緩やかに繋げていきます。喫煙所側からは真っ白なコンクリートによって閉ざされたトンネルの風景が見え、日常の一部として変化していきます。





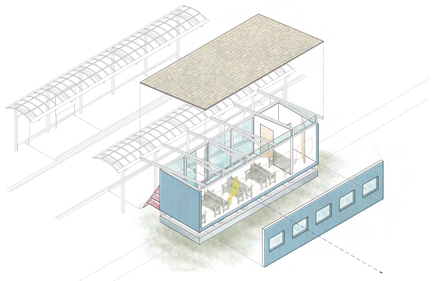
平面図　S=1:200

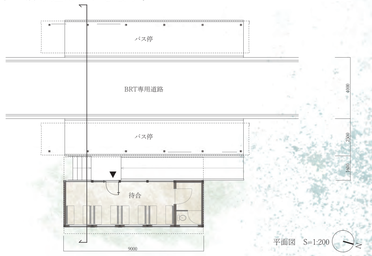




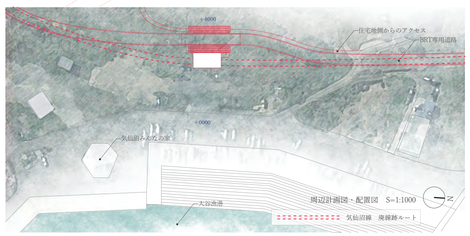
断面図　S=1:100

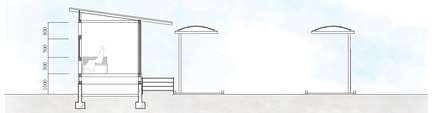
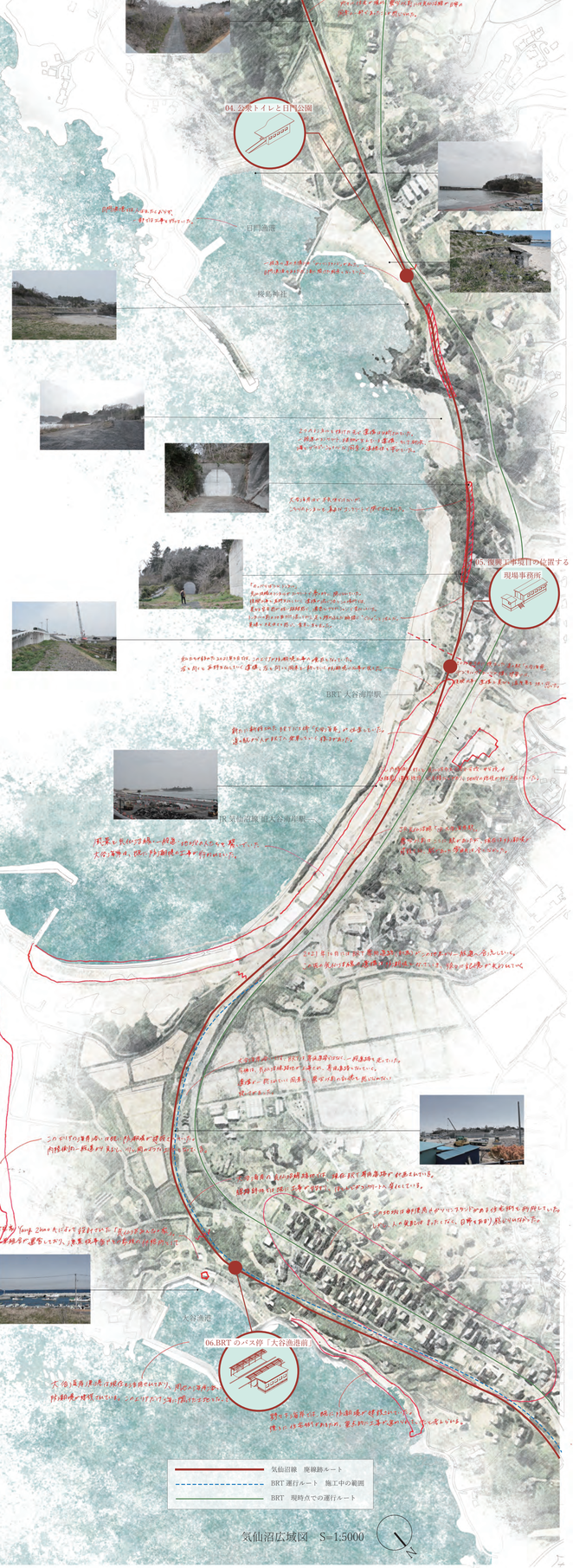
06. BRTのバス停「大谷漁港前駅」：現在BRT専用道路の工事を行っている海に開けた遺構跡地に、BRTのバス停を提案します。JR気仙沼線跡地がBRT専用道路へ移り変わっていく中で、記憶の重なる居場所としてバス停を計画し、海に開けた大谷漁港と繋がる日常を考えます。バスを待つ何気ない時間が震災以前の風景と重なり、記憶の宿る風景が日常の中へ溶け込んでいきます。





平面図　S=1:200





断面図　S=1:150